

維新前夜に、栗本鋤雲が パリで見たこと聞いたこと

——「暁窓追録」を読む——

しお かわ ひろ こ
塩 川 浩 子

栗本鋤雲（1822－97）は幕府医官として箱館に在任していた1859年、パリ外国宣教会のカシヨン⁽¹⁾と知り合い、カシヨンから聞いた情報をもとにして「鉛筆紀聞」をまとめた。その後、鋤雲は士籍となり、1863年、江戸に召還される。同年カシヨンは、パリ外国宣教会から許可を得ないまま一時帰国したため除名されたが、翌1864年、日本に戻って第2代駐日フランス公使ロッシュ⁽²⁾の通訳となった。

民間貿易に力を注ぐイギリスに対し、ロッシュは幕府支援による利益を重視する方針を固め、通訳以上の仕事をするカシヨンと軍艦奉行・外国奉行を歴任する鋤雲に支えられて、横須賀製鉄所（のちの横須賀造船所）建設、横浜仏語伝習所設立、フランス軍事顧問団の招聘に道を付ける。そして1867年2月には、將軍徳川慶喜の名代として徳川昭武をパリ万国博覧会に送り出した。カシヨンは前年すでにフランスに戻っており、接待に回った。他方、鋤雲は昭武一行出発の5ヵ月後に、ナポレオン三世（1808－73）に宛てた慶喜の親書を携えて急遽フランスに向かい、向山黄村の後を襲ってフランス滞在外国奉行（公使）となり、日仏関係構築に努めた。しかし翌1868年初頭に大政奉還を知った鋤雲は5月にパリを出発し、帰国した。

「暁窓追録」は、1867年9月から約8か月のパリ滞在中に鋤雲が見たこと聞いたことをまとめたもので、「鉛筆紀聞」とともに1869年、『匏菴十種〔鉛筆紀聞・暁窓追録〕』（2冊）として公刊された⁽³⁾。本論は「暁窓追録」を異文化理解の記録として読む試みである。

1. 1867年のフランス

鋤雲が見て聞いて「暁窓追録」に書いた頃のフランスは、後世の目にどう映るか。

(1) パリ大改造、社会改革、経済的繁栄とクレディ・モビリエの崩壊

フランスの首都パリは第二帝政時代（1852－70）に変貌する。ナポレオン三世のパリ美

化構想のもとに、セーヌ県知事に抜擢されたオスマンが行ったパリ大改造の結果である。東西と南北の広い直線幹線道路やエトワール広場などから放射線状に延びる道路、セーヌ河の水運、鉄道などの交通網が整い、東西南北に計4つの公園が完成し、オペラ座を初めとする劇場、病院、ホテル、博物館、凱旋門、パノラマなどが建設され、ガス灯と上下水道が整備された。これらの事業は雇用を創出し、また不動産の収用には、法的手段と多額の資金が使われ、パリ大改造は社会改革、経済的繁栄さらに金融戦争へと波及効果をもたらした。フランス経済は一気に産業資本主義の段階に達した。

その社会改革に大きく関わったのが、ペレール兄弟のクレディ・モビリエである。ペレール兄弟は1840年代、フランス鉄道建設の草創期にロスチャイルド銀行から資金を引き出して鉄道建設に乗り出した。第二帝政期になると、サン・シモン主義に共鳴するペレール兄弟はナポレオン三世の支持を得て、株式投資銀行クレディ・モビリエを創設する。やがてクレディ・モビリエはヨーロッパ各地でロスチャイルド銀行などと金融戦争を繰り広げるが、まさに1867年の9月に結局、崩壊する。クレディ・モビリエは、パリ大改造で重要な役割を演じる不動産会社に関わっていたので、パリ大改造の財政運営も厳しく糾弾される。

(2) 万国博覧会の成功とメキシコ皇帝マクシミリアンの悲劇

ナポレオン三世は積極的な対外進出政策をとって軍事的栄光を求め、国民の支持を確保した。クリミア戦争終結を受けて1856年に開かれたパリ講和会議は、フランスを地中海域における調停者の地位に押し上げた。さらに1859年のイタリア統一戦争におけるオーストリアに対する勝利で、ナポレオン三世はフランス国内の支持を広げた。またコーチシナ、中近東、アフリカでも植民地を拡大していった。

しかし普墺戦争でフランスは、介入の時機を失ってルクセンブルク併合に失敗、1867年5月のロンドン会議で、ルクセンブルクは永世中立国になる。そして同年6月、第2回パリ万国博覧会の褒章授与式の日、フランス帝国の祝祭が頂点に達したとき、メキシコ皇帝マクシミリアン銃殺の報が届く。フランスのメキシコ介入は失敗した。ナポレオン三世の軍事的、外交的栄光は傷つき、第二帝政の威信は揺らぐ。

2. 「暁窓追録」の西洋

(1) 「楽土・楽邦」と称すべきパリ

① 「法令の密・邏卒の蔽」

大改造により上下水道を備え、6、7階建て石造りの家屋を列ねる清潔なパリは、「法令の密・邏卒の蔽」と「気灯の明」に守られているため安全で、地震などの天災もなく、鋤雲に言わせれば「真に楽土・楽邦」(149頁)である。

a. 「法令の密」

「暁窓追録」の最初の話題は、その「法令の密」である。冒頭、鋤雲はナポレオン三世の政令を取り上げ「実に驚歎欽羨に堪へざるなり」（142頁）と絶賛する。鋤雲はその源にナポレオン法典⁽⁴⁾があることを突き止め、「吏となりて上に在り令を奉ずる者、民となりて下にあり令を受る者、共に此律に因りて断定し断定せられ、更に一語不服の者なし」（143頁）という。そしてナポレオン法典が「政治に要なる」ことを知った鋤雲は、通訳にその翻訳をさせたいと考える⁽⁵⁾。プロイセンや、イタリア、オランダ、スペインなどはナポレオン法典を参考にして自国の法律を見直したし、鋤雲によればイギリスの法律学者までナポレオン法典に注目しているのだ。難解な専門用語に関しては、日本総領事エラルド⁽⁶⁾とカションが、栗本貞次郎⁽⁷⁾への協力を約束し、計画はすでに具体化している。鋤雲は意気軒昂で、佐野栄を介して佐賀藩主に献本する予定まで語る。

さて鋤雲は、万博のためにパリ在留中の清水卯三郎と吉田次郎が、「貨品授受の齟齬」（144頁）のために訴えられた事件を例にとって、ナポレオン法典に基づいた実際の裁判を説明する。二人は裁判官に「左手を挙げ天に誓いて訴る無く隠す無く委く真実を言へ」と促され、そのようにする。その日は、裁判官が事情聴取し、書記が記録するだけである。後日、裁判官が原告と被告の双方を呼び出し、「我今彼此の詞に拠り、傍ら保証人の言に照し、其情実を繹ね定めてナポレオンコード何条の律に従ひ、其曲実を判じて某々の科に処せり」と判決を言い渡す。当事者は圧服されず、裁判が迅速に行われるばかりでなく、真実を語らなければ話のつじつまが合わなくなるので訴訟が減り、理想社会に近いと言えるだろう。そして判決が公平で傍聴人が満足すれば「皆手を拍ち喝采し、即晩新聞紙上に上せて都府に充府し、不公平なるも亦然せり」（145頁）という。ナポレオン法典があっても不公平な判決が下される可能性を伝える鋤雲の冷静な判断力を高く評価したい。

鋤雲は引き続き、敬愛を込めてフランスの弁護士の職務を紹介する。

b. 「邏卒の厳」

当時、2000人の制服制帽にサーベル姿の巡査がパリ内外で交通整理などを担当しており、鋤雲は「老少、是に頼りて踏踏なし。真に無かる可からずの職なり」（146頁）と説明する。そして具体的に、万国博覧会の仕事でパリ出張中だった長崎の男が、道に迷って巡査の世話になった体験談を紹介する。遠路を厭わずホテルまで同行した巡査が心ばかりのお礼をキッパリ断ったこと、また職務なのだから巡査に礼をする必要はないし、巡査は礼を受ける理由がない、とフランス人に言われたことを鋤雲は伝える。鋤雲は、道行く人に優しく自己に厳しい巡査たちについて「邏卒の厳」と言ったのだろうか。「暁窓追録」に、厳しく取り締まる巡査は登場しない。

② 「気灯の明」一バリ大改造

パリ大改造は進行中である。「此挙行はれてより既に十年」(151頁)と鋤雲は説明するが、ナポレオン三世がバリ大改造をオスマンに託した1853年から起算すれば、じつは「十年」でなく14年である。鋤雲は「新築美麗の家屋」が10日でその片鱗を失い、草むらの空き地に「俄然雲聳七層楼を現ずる」のを目撃した。まっすぐな広い道路は人や物の往来を楽にするが、まだ使用に耐える家や愛着ある景観を破壊されれば民衆から不平が出るのではないかと心配する。するとカションが「鉛筆紀聞」のときのように答える。最初は愁訴百出し、なかでも祖先の墳墓の改葬を強いられた者が同情を集めて衆議に諮られたが、オスマン知事が「必ず己の一身を便するが為に衆人共に便とするの挙を妨ぐる理なし」(152頁)と論破した。と。ここで鋤雲も口を噤む。公私に関するオスマンの考え方に対する、鋤雲の共感が読み取れる。

ナポレオン三世の議会演説が聴けなかったことを残念がる記述(174頁)があり、鋤雲が立法府に対して興味をもっていたことは察せられる。しかし大統領によって任命されるセーヌ県知事が議会の了承を求める体制に関するコメントはない。

道路に関する鋤雲の関心は並々ならぬものである。日常の清掃方法まで記され(170頁)、アスファルト舗装に関する質問に満足な回答ができなかったグラモンは「後に詳記し送らんことを約した」(171頁)と報告される。

パリ大改造の費用に関する説明はあるが、明瞭とはいいがたい。増税によるのではない、と鋤雲が言おうとしていることは察せられ、鋤雲によれば「固より会社の出金」(151頁)である。またパリ入市関税がその費用に充当されるという⁸⁾。そしてサン・シモン主義に基づく、ナポレオン三世の民衆のための政治に関する、シーボルト⁹⁾による説明が紹介される。20年前のパリの労働者蜂起に鑑みて、ナポレオン三世はバリ大改造による雇用創出を考え出し、私財を投じたり国費を費やさずに「民の力を以て民の命を養ひ、帖然として変動する勿らしむ」(152頁)と。シーボルトの解説はあまりにも簡単だが、的外れではない。その後続く「真に治国の巧みなる者と云べきなり」というナポレオン三世札賛は、シーボルトでなく鋤雲の意見と考えたい。

1867年9月のクレディ・モビリエの決定的な敗北や、その後オスマンが財政面で糾弾される事件を鋤雲は黙殺する。クレディ・モビリエが破局に至る遠因となったスエズ運河開削について、鋤雲は「是法国商社の挙に成る所」(176頁)と説明するのだが。なお江戸幕府の取引銀行は、クレディ・モビリエに対抗して作られたソシエテ・ジェネラル銀行だった。

パリ大改造は「更に三十年を待て始て全く了せんと云へり」(151頁)と鋤雲は書く。しかし3年を待たずに、パリ大改造の立役者だったナポレオン三世もオスマンも、またそう

記した鋤雲自身も、政治の表舞台から姿を消した。

(2) ヨーロッパの変貌

「鉛筆紀聞」のヨーロッパはフランス、フランスのライバルとしてのイギリス、日本の友好国としてのオランダ、日本の脅威としてのロシアが中心で、主な情報源はカションだった。しかし「暁窓追録」の鋤雲は、パリ駐在日本公使として複数の情報源を確保していた。まず新聞、次に昭武に随行している幕臣たち、昭武を取り巻く外国人、そしてパリ在留あるいはヨーロッパ各国出張途上の日本人に加え、フランス外務省関係者、日本学研究者などである。

「暁窓追録」にアメリカは登場しない。イギリスとオランダの存在感は、「鉛筆紀聞」に比較すると希薄である。ロシアはポーランドを滅亡させた国として登場する。昭武の訪問を受け入れたフランス、スイス、オランダ、ベルギー、イタリア、イギリスのうち、フランスはもちろんだが、スイス、ベルギーが親近感をもって紹介される。イタリアに関してはガリバルディが、「狂妄を不免と雖も、亦一個の奇男子」(158頁)と、留保を伴いながらも好意的に紹介される。また普墺戦争(1866)で敗れて復興に努めるオーストリアに、優しい視線が注がれることを指摘したい。そして何よりも、プロイセンが圧倒的な存在感を感じさせることに注目したい。

① 「新捷の大国」プロイセン

プロイセンは「新捷の大国、気焰方に熾んに国内を挙り、丁壮は皆兵にして勇氣勃振、恰も刃の新たに劔を出る如く、鎧光四発し、是に触れば忽ち死せんとするの機、人々眉宇に現れたり」(157頁)と、その軍国主義を鋤雲は見事に表現する⁹⁹⁾。

プロイセンが強くなったのはビスマルク(1815-98)の首相就任(1862年)以来のことと聞き、鋤雲は「ビスマルク政を執るに及びて兵を練る七年、一朝是を用ひ、旬日ならずして地を拓くこと二千里、現世界帝王の最と称するナポレオンと雖ども、猶畏憚するに至る。何ぞ其壮なるや」(158頁)と、戦争に強いビスマルクを称える。フランスとプロイセンがルクセンブルクをめぐる臨戦状態にあったとき、ナポレオン三世は、プロイセン相手では「必勝を保ち難きを知り」、だからこそ開戦派のフランス外相ドルアン・ド・リュイス¹⁰⁰⁾を罷免してまで普墺戦争介入を回避し、イギリスとロシアの講和案に同意したのだ。ただし鋤雲は「今日に至り国人深く歎惜せり」と付け加える。ロンドン会議でルクセンブルクの永世中立が確定したのは1867年5月のことである。軍事に関してはナポレオン三世よりビスマルクのほうが長けている、と鋤雲は認めざるを得ない。

そのうえビスマルクは戦争後の、講和会議における論戦にも強い。パリ万国博覧会を訪

れたビスマルクは「頭禿齒豁、淳然たる一の田舎翁のみ」と鋤雲の筆に容赦はないが、それも「然れども議論侃侃泰山も移すべし。此言は易ゆ可からずと云の氣象ありと云ふ」(158頁)と、ビスマルクの雄弁を強調するためかもしれない、とさえ思われる。

ところで1860年代初頭にビスマルク・ブラウンと呼ばれる茶色の化学染料が発明、開発された。そのビスマルク・ブラウンは、「暁窓追録」によれば、鋤雲の滞在中にパリで流行色となったらしい。鋤雲は、これを「用ひざる者は迂にして時好に後ると訾笑せり。其敵国に迄貴重せらるる、此の如し」(158頁、傍線引用者)と書く。フランスがプロイセンに宣戦布告するのは1870年だが、鋤雲の眼に映るフランスは、すでにプロイセンの敵国である。

さて鋤雲は、「暁窓追録」の中ほどで軍事費談義を始める。

それは、まだ鋤雲が日本にいたところにロッシュから聞いた話から始まる。昔、某国の名軍師が某国の王に授けた必勝三訣とは、一に貨幣、二に貨幣そして三に貨幣だった。いまヨーロッパには、有事の際に各国が軍資金調達のために必ず訪れる大富豪三兄弟がいる、と(160頁)。カシヨンの補足説明もあるが、三兄弟がロスチャイルド兄弟のことかペレール兄弟のことか、あるいはその他の三兄弟のことなのかは判然としない。話の核心は、鋤雲が楮幣と呼ぶ国債の話である。「国力強く、政令確かなれば、人々争ひ買ふ、故に薄息にして乍ち售れ、然らざれば是に反す……善政美治の国は楮幣の価、常に現貨より貴し。然して稍や変乱動揺の機あれば乍ち低下す」(161頁)。その例として、イタリアに争乱があったときパリのイタリア国債が値崩れしたことと、ルクセンブルク問題でフランスとプロイセンが争ったとき、プロイセン国債は値崩れしなかったことが紹介される。鋤雲は「是に於て勝敗の兆見へたりと云へり」(162頁)と断ずる。当然のことながら、別の要素が関係するから、フランス国債には言及しない。鋤雲の軍資金調達の説明は、パリ大改造の資金調達の説明と違って、じつに明快である。鋤雲がプロイセンを評価するようにソシエテ・ジェネラルが江戸幕府を評価していれば、ソシエテ・ジェネラルは、とうに江戸幕府に融資していることを鋤雲は理解している。

「暁窓追録」のなかにプロイセンを辿っていくと、鋤雲がプロイセンに引かれている気配が感じられる。だがそのころのプロイセンは、遠い日本に、あまり関心がないように見える。昭武のプロイセン訪問さえ実現しない。

② ナポレオン三世は「現世帝王の最」

a. 民衆の支持

ナポレオン三世は「容貌不揚、言詞咄々口より出すに不能に似たり。遊宴舞蹈の際と雖ども、唯左手鬚を撚り、右手肘を撫し、黙して盤旋し、間ま或は手自ら茶を捧げ、人に吞

しむるのみ」と、しばしばナポレオン三世に接見した昭武は語ったらしい。鋤雲は「大智は愚なるが如し、其れ此の謂ひか」（179頁）とコメントしている。

ナポレオン伝説を利用し、権謀術数をめぐらして即位したナポレオン三世だが、即位後は「極めて力を治国に尽し、勉めて衆庶の欲心を得て、然る後止まんと欲するに似たり」（177頁、下線引用者）と鋤雲は書く。また鋤雲がパリに滞在していた1868年1月は20年ぶりにセヌ河が結氷したが、ナポレオン三世は皇妃ともども「衆に雑は」（148頁、下線引用者）ってスケートをするような、親しみやすい皇帝だった、という。60歳だというのに「猶年々東西巡行し、辺境遐壤、到らざる処なく、到れば則ち民の疾苦を問ひ、其利便を考索し、貧民の棲息に安き家屋を創意」（177頁、下線引用者）し¹²、また「物価騰貴すれば后と共に微行し、陰に其縁由を質するの類少な」くない。したがって「下民親附し、至る処来蘇の念を為す」（178頁、下線引用者）と鋤雲は書く。

このようにナポレオン三世が社会政策の充実によって「衆庶」「衆」「民」「貧民」「下民」等の支持を確保していることを鋤雲は高く評価し、「謂て現世帝王の最と為す、誰か違詞あらん」（178頁）と、ナポレオン三世の「大智」を確信する。

b. 軍事的栄光の夢

1867年10月25日にオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の閲兵があり、鋤雲も参加した。馬上のナポレオン三世は左右に帽子を振って国民の歓呼に応じ「同等の人に殊ならず。其賤野に対し貴を不挾ること、大抵此類なり」（155頁）と、相変わらず民衆に支持されるナポレオン三世を鋤雲は賞賛する。しかも折しもガリバルディーのローマ解放の企みがあって「伊国の首鼠を怒りて」（155頁）ナポレオン三世は「兵を伊境に臨ましめ」（159頁）、他方プロイセン牽制のためにライン河に出兵し、そのうえで「十二万の兵を操練す、真に愉快事なり」（155頁）と、鋤雲は、とりあえずこの日の閲兵を喜ぶ。

しかしパリ滞在中フランス兵の操練を3、4回見たが「常に隊伍斉整画一ならず、往々参差欹斜する者あり、甚だ観に美ならず」（155頁）と、不満はわだかまる。山高郁堂¹³も、ブリュッセルとマルタ島の操練は「遥かに整齐、観るに堪へたりと云へり」（156頁）と鋤雲に同調する。それに対しシーボルトは、クリミア戦争のときフランス軍がセバストポリでマラコフ要塞攻略に成功した話（1855年9月）と、英仏軍が天津に入ったときのフランス兵の活躍（1858年5月）を持ち出して「フランスの陸軍精勁なるは英の跂及する所に非ず」（156頁）ととりなす。すると鋤雲は、シーボルトの挙げた、ひと昔前の実戦の例に縋りつき、「兵固より練らざる可からずと雖ども、然れども真の強弱は自から其外に在りと見へたり」（156頁）と結論を急ぐ。幕府のフランス軍事顧問団招聘に関わった鋤雲がフランス軍の操練を見る目は少し厳しく、しかし優しい。

さて民衆の支持するナポレオン三世が「現世帝王の最」であることを認めながらも、鋤雲は「猶一事、国民不服謗議、新聞紙に満るあり」(178頁、下線引用者)と書く。一事とは、メキシコ皇帝銃殺事件である。ナポレオン三世は、「衆に議せず独裁を以て」(178頁、下線引用者)オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の弟マクシミリアンをメキシコ第二帝政の皇帝の座に座らせた。しかしフランス軍が撤収するとメキシコ皇帝はファレスの反攻に敗れ、1867年6月に銃殺された。「始より国人の悦ばざる」(178頁、下線引用者)状態であったため、またプロイセン戦への備えを理由としてナポレオン三世は「坐視して不救、又之を弔せず」と伝え、鋤雲はナポレオン三世の弁護を断念して「是を以て大に其威徳を損ぜり」(178頁)と、結論を出す。

ところで本論2.(2)②a.で取り上げた「衆庶」「衆」「民」「貧民」「下民」と、メキシコ皇帝銃殺事件で新聞紙上にその不服謗議をぶちまく「国民」、「衆に議せず」の「衆」、最初からメキシコ介入を歓迎しなかったという「国人」を、みな等しく参政権のあるフランス国民である、と鋤雲は認識しているだろうか。納税額による区別のない普通選挙が行われるようになったのはフランスが1848年、日本が1925年、そして女性が参政権を得るのはフランスが1944年、日本が1945年である。

c. 第2回万国博覧会の成功

「予の最もナポレオンに敬服するは、唯博覧会の一挙なり」(179頁)。これが鋤雲のナポレオン三世論の結論である。博覧会は「宇宙間の物品」を集め、それと同時に「世界帝王を籠絡し己の範囲中に納れ、不知不識、巴里輦轂の下に來り集らしむ」。パリは地の利が良いとはいえ、多くの者が「其術、豈巧ならずや」(179頁)と、ナポレオン三世の手腕を賞賛する、という。

パリに集まった「宇宙間の物品」のうち「曉窓追録」が誇る日本の特産品は、「世界第一品」(166頁)とされる楮紙、「宇宙第一品たることは天下の公論たる」(166頁)漆器、パリで人気のある広東焼きと七宝焼き、スイスの女性が好んで身に付ける絹織物などである。他方アメリカ人は「仮歯に巧み」なので各国がアメリカの仮歯を重んじる。鋤雲は「他の長を取り己の短を補ふ、是技術の交易なり」(176頁)と書く。採長補短の技術導入を一堂に会して行うのが博覧会、すなわち博覧会は異文化交流の場であると鋤雲は考える⁹⁰。

また博覧会は各国の元首を初め、世界から人を集める外交の場でもある。「曉窓追録」は、パリ万博を訪問した元首のうち、日本の将軍の名代徳川昭武のほかに、オーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ1世(155頁)、ビスマルク首相を同伴したプロイセン国王 ヴィルヘルム1世(158頁)、ロシア皇帝アレクサンドル2世(177頁)に言及する。

鋤雲が評価するナポレオン三世の外交的栄光は、戦争でなく博覧会なのだ。

(3) パリで日本を考える

① フランスでは美、東洋では美ならざるもの

a. 食文化あれこれ

鋤雲は「予、常に笑ふ。書生の漢籍を好む者、常に支那を尊尚し雅致風韻ありとし、洋書を読者、常に欧羅巴を主張し開化文明なりとし、共に甚だしきに至りては、飲食・衣服の末に至りても各々其好む所に従ひ、強めて夫に摸倣せんことを欲する者を見て窃に是を陋笑せり。然るに久しく巴里に在りて、彼国の人の我国を好む者、亦甚だ我俗を敬慕し、我飲食・衣服をも好むを見て、初めて天下の通常非笑すべからざるを悟れり」(164頁)と前置きし、エラールとロニー⁹⁵を紹介する。エラールもロニーも紅茶でなく日本茶を好み、また鋤雲が「一個の奇書生」(165頁)と呼ぶロニーは、煙草も日本式にこだわる。

鋤雲自身は、フランス人が好む食物だからといって珍重するわけではない。たとえばヤマシギ⁹⁶は軒にぶら下げて熟成させ、「微臭を生ずるを待て煮る。嗜者頗る多し。是れ其臭を好むに非ず、其臭に慣るなり」(172頁)と説明するし、「野獣兎鹿の属、往々其臭敗に堪へざる者あり」と、極めて客観的に報告し、自分自身は異なる食文化圏に属していることを強調する。

しかしバターに関する鋤雲の比較文化論は、また異なった展開を遂げる。鋤雲は「我の醤油に似た」イギリスの「ソースと名る醃」は、「辛味を帯びて佳ならず」と簡単に切捨てたあと、バターに言及する。バターは「西洋に在りて、是を食へば極めて鮮美にして、一日も是なかる可らず」なのに、日本に持ち帰ろうとすると、塩を加えて腐敗対策を講じても紅海の東に達するころには悪臭を放ち、口にできる代物ではなくなる、という。「此他飲食、彼国にありては甚美にして、我が国に輸入すれば殊に美ならざる類、頗る多かる可し」(172頁)というのが鋤雲の結論である。

だが西洋でも腐敗したバターはおいしくない。またバターをフランスで買って日本に運ぶのでなく日本で製造すれば、日本でもバターはおいしい。バターは「彼国にありては甚美にして、我が国に輸入すれば殊に美ならざる類」だろうか。「鉛筆紀聞」のカシンの意見に励まされ、軍艦を外国から買うのでなく日本で造ろうとする鋤雲のことだから、「では箱館でバターを作ろう」と考えることもできただろうに。

b. ナポレオン法典はキリスト教徒のものか

鋤雲は、「暁窓追録」の冒頭でナポレオン法典を取り上げたところから、ずっと「彼国にありては甚美にして、我が国に輸入すれば殊に美ならざる類」のことを考えていたのでは

ないか。ただしバターでなく、ナポレオン法典に関連して。

「西洋各国」においてナポレオン法典は「治国の要具」だが、「是を其儘東洋諸州に行ひ妨なしと為す可らず」(147頁)とカシオンは言う。カシオンによれば「印度人の如きは、必らず一人の囑を受けて保証人と成り天に誓ひ偽るなしと云ひ、又一人の囑を受けて保証人と成り天に誓ひ偽なしと云ふ、其天を偽り誓を忽にする絶て西人の無き所」であり、ナポレオン法典は、宣誓したら死守するキリスト教徒を前提としているというのだ。いかにもカシオンらしい見解である。しかし鋤雲はキリスト教徒でないうえに、カシオンを信用しきれない⁷⁷。ナポレオン法典が日本の治国の要具になるかどうかの判断を「訳成り刊行するの日、読者夫れ三思せよ」と、鋤雲は一旦、読者に委ねる。

しかし鋤雲は、すぐカシオンへの反論を試みる。フランス公使ロッシュは「横浜に在る日、常に我国風俗の美を賞し、亜細亜第一の美国、支那・印度の遠く及ぶ所に非ずとし、且支那は人身に譬れば老羸の極にして藥石の力既に救療する所に非ずとし、我国は少壮の人稍々風寒の患を冒する如く、纔に調護を加ふれば乍ち強健其始に倍する」(147頁)と言っていたが、鋤雲はそれを追従と思い、信じなかった。しかし1867年に横浜からマルセイユまで船旅をしたさい、また翌年その経路を逆に辿ったとき、上海、香港、シンガポール、セイロン、アデン、スエズに入港投錨のさいは戸締りと出入りを厳重にして窃盗に備えたが、横浜とマルセイユでは、その必要がなかった。このことは「我国海外に航する無慮数百人の周く知る所」(148頁)であり、「唯此一事、亦以て政令嚴肅・風俗淳美を知るの兆なり」と鋤雲は結論する。同時に、日本は「亜細亜第一の美国」というロッシュの言葉が正しいことを確信する。それなら仰々しい宣誓がなくても、日本では誓いを変え約束を違える卑劣な行為は抑えられるだろう。「豈其れ借り用ひざるべけんや」、すなわちナポレオン法典は、他の東洋諸州においてはともかく、日本においては治国の要具となるであろうから借用しよう、というのが鋤雲の結論である。

鋤雲の結論は間違っていないだろう。だが日本において、フランスにおけると同様にナポレオン法典を有効にする文化、日本以外の多くのアジア諸国にはなくて日本にはある、キリスト教文化に代わる文化とは何なのか。それを鋤雲に聞いてみたい。

② ポーランド人亡命者への同情

万博見物のためにパリを訪れたロシア皇帝アレクサンドル二世が、ナポレオン三世の案内でパリ郊外に行ったとき、ポーランド人亡命者による暗殺未遂事件が起こった。ポーランドは「往時兵力頗る熾にして、魯と抵抗し久しく不屈、魯是を惡む、年あり。輒近に至り、其不振に乗じ、遂に是を滅せり」(176頁、下線引用者)と鋤雲は書く。「輒近」といってもロシア、オーストリアとプロイセンがポーランド分割を行ったのは70年以上前の1772

年、93年および95年の3回である（ただしオーストリアは2回目の分割には不参加）。94年にコチチュシュコが蜂起したが、あてにしていたフランスからの援助が得られずに失敗し、95年の条約で、かつて大国だったポーランドは世界地図から消えた。鋤雲によれば、その後もロシアはポーランド人を迫害し、「於是、波の遺民深く魯帝に恨み」（177頁）があった。

犯人は逮捕され、流罪に処せられた。この事件に関して鋤雲はコメントを控え、カシヨンの「遺民敵国の帝を狙撃す、法律に於て報讐の属とす。私怨人を殺すの類に非ず。故に法帝、是を流に処し、魯帝更に不疑と云ふ」（177頁）という解説を加えるだけである。しかし事件を伝える鋤雲の短い文章に、ロシアに対する鋤雲の反発と犯人に対する同情が感じられることを指摘しておきたい。日本では、その後、多くの人がポーランドの悲運に同情し、さらにポーランドの状況を他山の石と考えた。たとえば落合直文は、ドイツ公使館付武官福島正安のシベリア単独横断を称える『騎馬旅行』（1893年）に「波蘭懷古」を忍ばせたが、これは後に軍歌として愛唱される。

（4）「王侯相将、寧ぞ種有らんや」

「暁窓追録」の最後に、鋤雲はフランスと日本を見晴るかす。いまヨーロッパでは人材登用に出自は不問と言われるが、学問が不要であるほど才能に恵まれた者は少ない。だから学問する余裕がない貧しい者は自然に排除され、門閥ができる。現に大臣は、名士でないにしても豪農、豪商の子弟である。鋤雲は「王侯相将、寧ぞ種有らんやは乱世の語にして、治世の談に非ざるなり」（180頁）と書き、筆を置く。いま日本は「王侯相将、寧ぞ種有らんや」の語が意味をもつ乱世であることを確信して。

この乱世に、鋤雲のパリ体験は、どのような実りをもたらすか。

① フランスの農業―「其人甚だ勉強す」

大政奉還を知って帰国した鋤雲は、現在の東京都文京区小石川に帰農した。

「暁窓追録」は日本と異なる、フランスのブドウの栽培法と利用法を伝えている。渡航前の鋤雲は、日本人ほど農作業に力を尽くす国民はいないだろうと思っていたが「法の境に入り、田野悉く闢け、地力・人力併せて尽くさざる所なく、高燥卑湿耕す可からざるの地は、栽るに細沙を以てし、一の荆棘を雑へず以て牧養に供し、樹林は雑草を芟除し悉く糞培を加へ、籬落田畔の隙地と雖、會て荒蕪蔓草に任するなきを見て、大に驚愕せり。若し我国をして如此に至らしめば、何れの地も良田ならざる無く、更に一の日本を生ずるに齊しからん」（169頁）と変説する。そしてロッシュが常に「東洋の各国、土地皆極めて肥美なれども、其人多く懶惰にして、西洋諸州は、大抵瘠土礪确なれども、其人甚だ勉強す」

(169頁)と言っていたことを思い出す。

箱館時代の6年間に薬園経営と医学所の設立、綿羊の放牧、疎水、養蚕などに従事して成果を挙げた鋤雲が、こんどはバターとブドウ酒のフランス式農場経営をする、というような見果てぬ夢を追う可能性はなかったのか。

② 新聞の時代

鋤雲は東京毎日新聞社に入社したあと報知新聞に移り、1874年以降12年にわたって報知新聞で健筆を振るう。

いよいよ新聞の時代である。「暁窓追録」には、新聞の両面印刷式輪転機の見学記があるし、電信網の説明もある(163頁)。しかし何よりも、「暁窓追録」が新聞の機能を認識していることを強調したい。まずは報道機能である。国債の記事は「新聞紙に出て明白」(161頁)である。また判決が下されれば、判決が公平であろうと不公平であろうと、すぐ新聞に掲載され(145頁)、批判にも曝される。次に鋤雲が不適当な報道が民衆を誤った方向に誘う危険を認識していること、言い換えれば新聞の教育機能に気付いていることを指摘しておきたい。鋤雲によれば、親日家のオーストリア人がバリーで発行するある新聞が「極めて我国を讃美し、往々実に過たる者あり。予、其読む者を誤らんを畏れ屢之を論ずれども、頑なにして改るを不欲」(167頁)という¹⁶⁾。最後は論評機能である。前述の通り、メキシコ皇帝の銃殺事件をめぐるフランス国民の不服が新聞に満載されている、と鋤雲は書く(178頁)。新聞が多様な意見交換の場を読者に提供し、社会的合意を作り出す機能があることを鋤雲は認識している、と言えるだろう。またフランスの普墮戦争不介入に関する「今日に至り国人深く歎惜せり」(158頁)という記述、あるいはメキシコ介入に関する「始より国人の悦ばざる」(178頁)という記述は、新聞が作った社会的合意を紹介したものと言えるだろう。

江戸幕府の駐仏公使栗本鋤雲の、異文化に対する基本的な姿勢は、和して同ぜず、である。憂国の士で、日本への思いは強い。しかし時に自戒しなくてはならないほどのフランス好きでもある。「暁窓追録」は、平衡感覚に優れた幕末外交官の、異文化理解の記録である。

注

- (1) ウジェヌ＝エマニュエル・メルメ＝カション Eugène-Emmanuel Mermet-Cachon、1828-89。日本でカションを通称としたことに鑑み、本論ではカションとする。
- (2) レオン・ロッシュ Léon Roches、1809-1900

- (3) 現在、最も容易に手に取ることができる「暁窓追録」は、井田進也校注『幕末維新パリ見聞記』（岩波文庫）である。本論の引用は原則として同書により、以後、頁数のみを記す。ほかに「成島柳北 服部撫松 栗本鋤雲」明治文学全集4、筑摩書房（1969年）などに収録されている。なお駐仏日本公使として鋤雲が外国奉行川勝広道に送った手紙は、『川勝家文書』日本史蹟協会叢書57、東京大学出版会（1984年）に収められている。
- (4) 「暁窓追録」のナポレオン法典（「ナポレオンコード」）は、1804年にナポレオン一世が公布したナポレオン民法典だけでなく、民事訴訟法、商法、刑法、刑事訴訟法の4法を加えた5法である。
- (5) 鋤雲のパリ滞在中に翻訳担当官だった箕作麟作が翻訳し、間もなく「仏蘭西法律書」（1870-1874）という題で出版された。
- (6) Fleury Hérard。柴田剛中の遣仏使節の依頼により、1865年に日本総領事になった。
- (7) 1839-81、鋤雲の養子。留学生として幕府よりフランスに派遣され、パリに滞在した。
- (8) パリ市債は順調に売れたし、工事が始まると人と物がパリに集中し、パリ市の主要な財源であった入市関税は増加した。
- (9) Alexander von Siebold、1846-1911。有名なオランダ東インド会社の医師シーボルトの長男で、1862年から70年まで在日イギリス公使館通訳を務める。休暇で帰国する機会を利用して、昭武の渡欧に随行した。
- (10) 情報を提供したのは会津藩の横山主税、海老名郡治と唐津藩の尾崎俊蔵である。この三人はパリまで昭武に同行し、その後ヨーロッパを巡歴した。
- (11) Drouyn de Lhuys、1805-81
- (12) じっさい1867年に、ナポレオン三世自身が設計したシテ・ドメニルと呼ばれる労働者共同住宅がパリ12区に建設された。
- (13) 1842-1907、滞欧中の昭武のお守役を務めた。9月24日ブリュッセル入りして10月5日、郊外の練兵場で2500人余の実射調練を見学、また11月初めにマルタ島で4000人の調練を見学した。
- (14) 報知新聞に掲載された鋤雲の「農業博覧会の私評」（『匏庵遺稿二』続日本史蹟協会叢書5、東京大学出版会、1975年）によれば、expositionの訳語「博覧会」は鋤雲の造語である。この語を鋤雲が初めて聞いたのは、1864年、熱海にロッシュを訪ねたときのことだったが、カションの説明により、幕府医学館の薬品会のように「広く示す」と理解し、「博覧会」という訳語を思いついたという。なお鋤雲は、農業博覧会のほか、内国勸業博覧会と水産博覧会について、本格的な批評を報知新聞に寄せている。
- (15) Léon de Rosny、1837-1914。1868年、パリ東洋語学校に開設された日本語科の初代教授。
- (16) ベカス bécasse
- (17) たとえば「暁窓追録」と同時に公刊された「鉛筆紀聞」の題言（「成島柳北 服部撫松 栗本鋤雲」明治文学全集4、筑摩書房、1969年）のなかで鋤雲は、カションの言葉には「往々誇己詁人の語あり」と、書いている。
- (18) ただし問題の記事は確認されていない。鋤雲の勧告が功を奏し、発行前に修正された可能性もあるだろう。